**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４７回　（２０１８年８月７日）**

**・第４７回の勉強範囲：「第二章　信者たちとともに」２２頁～２３頁**

**【前回の勉強をさらに深める】**

**＜シュリー・ラーマクリシュナの武器は「プラナーム」＞**

シュリー・ラーマクリシュナは、歌、踊り、面白い話、食べさせる、子供のようなふるまい、ジョーク、美しい笑顔など、いろいろな方法で人を惹きつけたことは前回話ました。

それだけではありません、シュリー・ラーマクリシュナは、プラナームによっても人びとを惹きつけました。

**（１）プラナームをする目的**

**①目上の方に対する尊敬と謙虚な心の現れとして、プラナームをする**

プラナームのプラは「とても多い、とても完璧、とても良い、深い」という接頭辞です。

ナームは「頭を下げる」という意味です。ナマスカーラのナマと同じ言葉です。

ですので、プラナームは「深くナマスカーラをする」という意味です。

インドの伝統で、目上の方に対する深い尊敬の念と謙虚な心の現れとして、プラナームをします。

**②相手の中の神様にプラナーム**

相手の中に神様がいます、そのことを考えてプラナームをします。

相手の中に神様がいることを考えてナマスカーラをすることもプラナームと言えます**。**

プラナームはとてもとても深いです。神聖な態度です。

**（２）プラナームのやり方**

プラナームのやり方としては、

　足にタッチする

　五体投地

　膝にタッチする

などがあります。

・尊敬する相手に対しては、自分の後ろ姿を見せないようにしますね。例えば、王様には自分の後ろ姿を見せないために後ずさりするように。プラナームの後もそのようにします。それも謙虚さの現れです。

・神様に対して挨拶するときはプラナームをする、と言います。お坊さんに対しても、プラナームをする、と言いますね。神様に対してナマスカーラをする、とは絶対に言いません。ふつうの人に対しては、ナマスカーラ、またはナマステを使います。どちらも同じです。

**・頭を下げるという行為は謙虚と尊敬を表す（万国共通）**

ナマスカーラは、皆さんが皆さんにしますね。ナマ（頭を下げる）＋カーラ（する）

西洋では頭を下げて挨拶をする習慣はあまりないようですが、仏教、イスラム教でも挨拶のために頭を下げます。キリスト教徒は、普通のあいさつで頭を下げることはしませんが、教会でイエスの像の前で、頭を下げますね。頭を下げる、という行為は、どこにおいても、謙虚と尊敬のあらわれなのです。

**（３）シュリー・ラーマクリシュナは、謙虚さと尊敬をもち、相手に神様をみてプラナームをした**

シュリー・ラーマクリシュナはすべての人の中に神様がいるので、初めて訪れた人には、こちらからナマスカーラ、プラナームしました。ときどき、子供に対してプラナームしました。足にタッチはしなくても。

そして皆さんを惹きつけただけでなく、皆さんの心を勝ち取りました。

**・シュリー・ラーマクリシュナのプラナームの例（ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの例）**

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの家のとても近くに、シュリー・ラーマクリシュナの篤い信者のバララーム・ボシュの家がありました。シュリー・ラーマクリシュナは、何度もバララーム・ボシュの家を訪ねていたので、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、シュリー・ラーマクリシュナの名前を聞いたことはありました。雑誌に掲載されたシュリー・ラーマクリシュナの記事を読んだこともあったようですが、シュリー・ラーマクリシュナには興味がありませんでした。なぜなら、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはシュリー・ラーマクリシュナのことを聖者ではなくペテン師だと思っていました。インドでは聖者のフリをする人が結構いますから。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは有名な劇作家で俳優でした。彼はたくさんの芝居を作り、それらの芝居はとても人気がありました。ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは悪いこともたくさんしていました。良くも悪くも、彼は当時有名だったのです。ですので、シュリー・ラーマクリシュナも彼のことを聞いたことがありました。

二人はお互いのことを知っていましたが、直接会ったことはありませんでした。

あるとき、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュがベランダで座ってくつろいでいると、バララーム・ボシュの家に向かうシュリー・ラーマクリシュナの乗る馬車が通りかかりました。ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはシュリー・ラーマクリシュナを見ました。最初はシュリー・ラーマクリシュナがギリシュ・チャンドラ・ゴーシュにプラナームしました。そこでお返しにギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはナマスカーラをしました。たとえ尊敬の念がなくてもお返しをすることは礼儀ですから。すると、シュリー・ラーマクリシュナはまた、頭を下げました。仕方がないので、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュもそうしました。お互いに何度もしましたが、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、「もう結構」と先にあいさつをやめてしまいました。しかし、シュリー・ラーマクリシュナはつづけました。

二人が最初に、偶然出くわしたときのあいさつがそれでした。そして後になって、ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは、「シュリー・ラーマクリシュナはプラナームという武器で私の心を勝ち取りました」と言いました。

シュリー・ラーマクリシュナはそれくらい、謙虚な心を持っていたのです。

**・『カーンダナ　バーヴァ　バーンダナ』の「ティャジ　ジャティ　クラ マーン」**

協会で毎日夕拝のときに歌う『カーンダナ　バーヴァ　バーンダナ』に「ティャジ　ジャティ　クラ マーン」という歌詞がありますね。

**意味**

ティャジのもとの意味は「放棄」です。

シュリー・ラーマクリシュナのカーストはとても高い（ブラーミン）のカーストです。家族もとても特別な家族でした。

シュリー・ラーマクリシュナ自身が、たくさんの人から尊敬、礼拝される聖者です。しかしシュリー・ラーマクリシュナは、それらのことは振り払い、まったくうぬぼれもプライドもありませんでした。　　　　　　　　　　　　　☞（火曜勉強会20161108Khandanaより補足）

**（４）インドではすべての行いの中に霊的なことが入っている**

インドでは、普段の生活のすべての中に、霊的なことが入っています。

　あいさつ、食事、散歩、遊び、楽器を奏でる、踊り、それらすべての中に霊的なことが入っています。

日本人の中には、「インドの文化が面白い」と感じ、興味を持って勉強する方が結構いますが、その中には、インドの哲学、宗教があまり好きではない人もいます。それだと矛盾が生じます。なぜなら、インド文化のすべての中に、インド哲学、宗教のことが入っていますから。そのことを理解せずにインドの文化を勉強しても浅い理解しかできません。

**＜信者を理解して導くために、自分のことを信者にたずねた＞**

前回、シュリー・ラーマクリシュナはなぜ、「心の目で信者を見る」だけでなく、「信者に自分のことをたずねる」のか、という説明をしました。その中で、「信者の性格を深く理解するために自分のことをたずねた」、という理由もありましたね。

では、なぜ信者の性格を深く理解しなければならなかったのでしょうか。

その理由は、信者を導くためです。

シュリー・ラーマクリシュナは、まず信者のことを理解して、そしてその人に合った方法で導くのです。そのためにはその人のことを完璧に理解する必要がありました。

とても深い目的があったのですね。

**【今回の勉強】**

・📖 （読む）「信者たちとともに」２２頁上段Ｌ１～２２頁上段L１０

*朝八時ごろ、シュリー・ラーマクリシュナは予定どおり、カルカッタのバララーム・ボシュの家においでになった。ドラヤートラ\*の日であった。ラーム、マノモハン、ラカル、ニッテャゴパール、および他の信者たちが彼といた。Mもまた師の命にしたがってきていた。*

*信者たちと師は、神聖な白熱状態の中でうたい、そして踊った。*

*その中の何人かは忘我の境に入っていた。ニッテャゴパールの胸は感情の高調で赤みがさしており、ラカルは法悦に入り、完全に外界の意識を失って床に横たわっていた。師はラカルの胸に手をおいておっしゃった、*

（解説）

L９の「感情」という言葉は、「霊的な感情」に直した方がいいかもしれません。感情にはいろいろな種類がありますから。

この感情はふつうの感情ではなく、霊的な感情です。ベンガル語では「バーヴァ」と書いてあります。　（バーヴァの意味：存在、感情、感動、法悦、サマーディ、『用語解説』より）

ベンガル人なら前後関係でそれが特別なバーヴァであることがわかります。

**・ラカルの霊的な感情の深まり：バーヴァ・サマーディ**

ラカルの状態は、霊的にとてもとても深くなってふつうの意識がなくなりました。まるでサマーディのようですね。ふつうではないです。一番高いサマーディではないですが、バーヴァ・サマーディです。神様のことをずっと考えて、霊的な感情が深くなり、すべての意識がなくなることもサマーディのひとつです。

みなさんは、神様のことを考えて、霊的な感情が深くなり、その結果で外の意識がなくなるという状態を見たことがありますか？　ないですね。　ラカルの状態は、隣に誰が座っているか、何の話をしているかが全然理解できないほどの霊的な感情の深まりです。そのことを理解してください。

**＜シュリー・ラーマクリシュナのタッチ＞**

シュリー・ラーマクリシュナは、信者が外の意識がなくなる状態になりますと、タッチしてその人を元の状態に戻しました。

また、シュリー・ラーマクリシュナがタッチして、信者がサマーディに入ることもありましたね。

人にタッチする、という行為は何も特別なことではありませんね。シュリー・ラーマクリシュナは、何も特別なことをしませんでした。ですので、われわれはそれがどれくらいすごいことなのかあまり理解していないですね。『福音』を読むときに、書かれていることの内容をしっかりと理解せずに読んでいる可能性があります。

ホーリー・マザーのタッチにも、シュリー・ラーマクリシュナと同じような力が秘められていました。

**・シュリー・ラーマクリシュナのタッチの例　（スワーミー・スボダーナンダジの例）**

シュリー・ラーマクリシュナののちの出家直弟子であるスボダーがドッキネッショルへ二度目の訪問をしたとき、シュリー・ラーマクリシュナはスボダーにタッチしました。そしてスボダーに瞑想するように言いました。瞑想を始めるとすぐに言いようのない歓喜に満たされ、不思議な光を見ました。瞑想は徐々に深まり、彼は肉体の意識を完全に失いました。

そしてシュリー・ラーマクリシュナのタッチによって、再び通常の状態に戻りました。

☞（『真実の愛と勇気』３４０頁参照）

**・深い瞑想からホーリー・マザーがタッチして呼び戻した例（ブラフマーナンダジの例）**

ベルル・マトでシュリー・ラーマクリシュナの生誕祭が行われていた時、弟子たちが歌ったり朗唱している間に、ブラフマーナンダジはサマーディに入りました。外界に対しては完全に無意識となり、その顔は神々しい光に輝きつつ、かれは自室に運ばれました。いつまでもその状態を続けているので、兄弟弟子たちは心配しはじめました。そのとき出席していたホーリー・マザーにこのことを告げました。しかし彼女は心配の色を見せず、むしろ十分に喜んでいる様子で、「かれのことは心配いりませんよ」と言いました。それからブラフマーナンダジのそばにゆき、そっと胸のあたりに手を触れて、愛情深い声で、「ラカル、おさがりのご馳走を持って来て上げましたよ。お上がりなさい、私の子供」と言いました。ブラフマーナンダジは即座に平常の意識に戻り、ホーリー・マザーを見ると、彼女の足下にひれ伏しました。　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『永遠の伴侶』１０７頁参照）

・📖 （読む）「信者たちとともに」２２頁上段Ｌ１０～２２頁上段L１１

*「シャーンティ（平安あれ）」*

*これはラカルの法悦の最初の経験であった。*

（解説）

シャーンティではなく、ベンガル語では**シャーンタハ**です。意味は「元の状態にもどってください」です。「平安あれ」ではありません。

英語版では“Peace. Be quiet”です。その意味は、Return to the normal condition. です。ここでのBe quietは、Just be normal.という意味で使われています。

**ラカルの法悦は２回目**

『福音』のベンガル語版には「この法悦は、最初の法悦ではなく2度目です」という注釈がつけられています。Mさんはずっとドッキネッショルに住んでいたわけではないので、Mさんが見ていない時に、最初の法悦は起こりました。しかしMさんはそのことを知りませんでした。

・📖 （読む）「信者たちとともに」２２頁上段Ｌ１１～２２頁下段L２２

*彼は父とともにカルカッタに住み、ときどきドッキネッショルに師をお訪ねしていた。このころにはしばらくのあいだ、シャーンプクルのヴィディヤー・シャーゴル\*の学校で学んでいた。*

*音楽がすむと、信者たちはすわって食事をした。　バララームはまるで召使のように、謙虚な様子でそこに立っていた。誰も、彼をこの家の主人とは思わなかっただろう。Mは、まだドッキネッショルでナレーンドラと会っただけで、信者たちとはなじみがなかった。*

　*数日後に、Mは師をドッキネッショルに訪れた。午後四時と五時のあいだであった。師と彼とは、シヴァの聖堂の階段に腰をかけていた。中庭の向こうのラーダー・カンタの聖堂を眺めながら、師は忘我の状態にお入りになった。*

*のフリダイ\*が寺院を解雇されてから、シュリー・ラーマクリシュナは付添人なしで暮らしておられた。しばしば霊的状態にお入りになるため、彼はほとんど自分で身のまわりの用事はおできにならなかった。付添人がいないのはたいへん不便であった。*

*シュリー・ラーマクリシュナは、宇宙のなる神カーリーに話しかけておられた。彼はおっしゃった、「よ、誰も彼もが『私の時計だけが正確だ』と言います。キリスト教徒、ブラーフモーたち、ヒンドゥ教徒、回教徒、みなが言います、『私の宗教だけが本物だ』と。しかしよ、ほんとうは誰の時計も正しくありません。誰があなたを真に理解することなどできましょう。しかし、もし人がの心であなたにお願いするなら、あなたのによってどの道を通ってでもあなたに到達することができるのです。*

（解説）

**＜１００％完璧なのは真理だけ＞**

自分の道は正しい。

ほかの人の道が正しいかどうかはわからない。

それですと、問題はありません。しかし、

　自分の道は正しい。

　しかし他の人の道は間違っている。

そのように主張しますと、その時から問題が始まります。相手が怒って喧嘩が始まります。

その原因は、うぬぼれです。

**・１００％完璧な宗教はない（マーヤーの影響）**

神様の本性と真理は同じです。神様の本性と真理に近づくために、悟るために、宗教があるのです。

キリスト教の見方の真理と神様、ヒンドゥ教の見方の真理と神様など、表現はさまざまですが。仏教では、神様という言葉を使いませんが、真理は使います。

ヒンドゥ教はさまざまな宗教の中でも包括的です。これもオーケー、あれもオーケー、といいますが、それでも間違いがある可能性があります。

シュリー・ラーマクリシュナはヒンドゥ教徒でしたが、ヒンドゥ教も完璧ではない、と言いました。キリスト教、イスラム教が完璧ではない、というだけでなく、自分の信仰している宗教についても完璧ではないと言ったのです。

どの宗教も完璧ではないのは、マーヤーが原因です。マーヤーの中では、サットワ、ラジャス、タマスの3つの性質が混ざっているからです。１００％サットワにはできません。もちろん完璧に近い存在もあります。

世界中の時計がどれほど精密なものでも、秒の単位を限りなく細かくしていくと、どの時計も１００％完璧に正確というものはありません。それと同じように、１００％完璧な宗教はないのです。それがシュリー・ラーマクリシュナの主張です。

・本当に正しいのは真理だけです。真理をどのように正確に説明しようとも、ほんのちょっとだけ本当の真理とは違う可能性があります。

**＜真理を悟る＞**

**・信者の努力と神様の恩寵で真理を悟ることができる**

すべての宗教の中に間違いがありますと、我々は真理を悟ることができないのでしょうか？　いいえ、できます。

もし信者が、とてもあこがれをもって神様を呼び、瞑想し、さまざまな実践をしますと、神様の恩寵で真理を悟ることができます。

**・真理を悟るには：**

**①信者の努力が必要**

努力の源は、神様が下さったものです。神様が我々に努力ができる力を与えてくださいました。そして神様はその力を我々に使ってほしい。そして、もし、その信者の努力するための力が足りなければ、神様はさらにもっと努力ができる力を与えてくださいます。我々の力の源は神様です。もし、我々が努力をせずに恩寵だけを望んでも、神様は恩寵を与えてくれません。

**②最終的に神様の恩寵のおかげで悟る**

神様から頂いた力で努力をして、さらに努力をします。しかしそれだけでは、悟りはできません。神様の恩寵がないとできないのです。

ウパニシャッドの中でも、ブラフマンの恵みがあると、ブラフマンを悟ることができる、と言っています。

**・神様の恩寵がないと悟れないと言った例（スワーミージが兄弟弟子に言った例）**

ボラノゴル僧院で、若い出家直弟子たちが瞑想にふけっていた時、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、兄弟弟子に「みんな、瞑想をしすぎです。たくさん努力をしたからと言って、神様がすぐに現れるわけではないのですよ。ふつうの買い物はお金があればほしいものが手に入るが、悟りというのはそうではないのです。神様がくださるものなのです」と言いました。

**・バクティの悟りのイメージ**

ある人がたくさん瞑想をして、たくさん進歩して悟りがある部屋の前まで来ました。しかしその部屋のドアの前にはマハーマーヤーが立っています。マハーマーヤーが扉を開けてくれないと、あなたは悟りのある部屋に入ることができません。マハーマーヤー、神様の恩寵がないと、悟りもできません。

母なる神の恩寵があると、すべての宗教の道で悟りことができます。例外はありません。

・📖 （読む）「信者たちとともに」２２頁下段Ｌ２２～２３頁上段L５

よ、いつか私に、クリスチャンが教会であなたにどのようにお祈りをするのか見せてください。しかしよ、もし私が入って行ったら人びとはなんと言うでしょうか。もし彼らが大騒ぎをしたら、もし彼らが、ふたたびカーリー聖堂に入ることを私に許さなかったら。まあ、それなら私に、教会の扉のところからキリスト教の礼拝を見せてください」

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナは今から約１００年から１５０年前にインドに住んでいました。その当時のインドでは、カースト制度がとても厳しいものでした。ヒンドゥ教徒がもしキリスト教の教会に入ると、自らのカーストを失うことになるのでした。さらに、シュリー・ラーマクリシュナはドッキネッショルという、ヒンドゥ教の寺院に住んでいましたね。ですからもしキリスト教の教会に行ったことが知れ渡ると、ドッキネッショルから追い出される可能性もありました。

**＜シュリー・ラーマクリシュナはすべてをマザーにお任せした＞**

シュリー・ラーマクリシュナはキリスト教の礼拝が見たかった、だから、マザーにその準備をお願いしました。シュリー・ラーマクリシュナは「私は、キリスト教会にいきます」とも、「いきません」とも言いません。「私はなにもできません。すべてマザーが準備します。そして、「キリスト教の礼拝を見せてください」とマザーに祈りました。

・📖 （読む）「信者たちとともに」２３頁上段Ｌ6～２３頁上段L１２

　*またある日、師は例の光り輝く顔つきで、自室の小さいほうの寝台に座っておられた。Mはカーリークリシュナとともに到着した。この人は、友人のMが自分をどこにつれて行くのか知らなかったのである。「もし君が居酒屋を見たいと思うなら、僕といっしょに来たまえ。そこに一個の巨大なを見るだろう」とだけきかされたのだ。Mはシュリー・ラーマクリシュナにこのことを話し、師はそれをきいてお笑いになった。*

*（解説）*

**＜お酒のたとえで誘う＞**

ふつうの人は、お酒を飲む場所について、「喜び、楽しみ」のイメージが湧きますから、Mさんは居酒屋のたとえを使いました。

他にもお酒のたとえで、シュリー・ラーマクリシュナのもとに人を呼んだ例はたくさんあります。

**①（カリパダ・ゴーシュの例）**

カリパダ・ゴーシュという大酒のみがいました。彼は先ほど話したギリシュ・チャンドラ・ゴーシュの友達でした。あるときギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはカリパダ・ゴーシュを「とても素晴らしい酒があるところにつれて行ってあげよう」といって、ドッキネッショルにつれてきました。カリパダ・ゴーシュはドッキネッショルに着いてからも「酒はどこにあるのだい？」と何回もギリシュ・チャンドラ・ゴーシュに聞きました。

その時、**シュリー・ラーマクリシュナがカリパダ・ゴーシュにタッチ**ました。

カリパダ・ゴーシュに変化が起こりました。彼は号泣しました。なぜなら

ⓐこのような楽しい霊的な経験をこれまでにしたことはなかったから。

ⓑこれまでの生活がどれほどひどかったか、ということに気づき後悔して泣きました。

そして彼は本当にその時から変化して、シュリー・ラーマクリシュナのとても偉大な信者になりました。

**②（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの親戚の例）**

スワミージーの親戚にとてもハイクラスのミュージシャンがいました。彼はアヘンやそのほかのドラッグをいつも飲んでいました。あるとき、スワミージーが彼に「とても素晴らしいドラッグを体験できる場所に行きましょう」と言って、シュリー・ラーマクリシュナのもとにつれてきました。**シュリー・ラーマクリシュナが彼にタッチ**をすると、彼は深い霊的な感情になって、意識を失いました。彼が普通の意識に戻ったとき、彼は「また同じものが飲みたい」と言いました。これまでのドラッグはシュリー・ラーマクリシュナのタッチによる経験に比べると、取るに足らないものとなりました。

・📖 （読む）「信者たちとともに」２３頁上段Ｌ１２～２３頁上段L１６

*師はおっしゃった、「礼拝と神との交流の至福は、ほんとうの酒、神への深い愛の酒だ。人生の目標は神を愛することである。バクティ\*は唯一不可欠のものである。ギャーナ\*と推理によって神を知ることはこの上もなくむずかしい」*

*それから師はおうたいになった。*

（解説）

「礼拝と神との交流の至福」と書いてある部分は、本当は、「礼拝の至福と、神との交流の至福（またはサマーディの至福）」が正しいです。

**＜バジャナーナンダ（礼拝の至福）、ブラフマーナンダ（神との交流の至福,サマーディの**

**至福）＞**

「礼拝と神との交流の至福」と書いてある部分は、

ベンガル語でバジャナーナンダとブラフマーナンダです。

**①バジャナーナンダ　bhajanananda　「礼拝の至福（神を想い歌い踊る信者の至福）」**

バジャナーナンダとは、バジャン（礼拝）＋アーナンダ（至福）＝**礼拝の至福**です。

バジャナーナンダを「礼拝」と訳しているようですが、ここでの

**礼拝とは、神の歌を歌う、踊る、神様の本を読む、プージャ、神を瞑想する、これらすべてのことです。**

それらのことを通して至る至福の境地をバジャナーナンダと言います。

バジャナーナンダとは、バジャン（礼拝）＋アーナンダ（至福）＝**礼拝の至福**です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『福音』４９２頁　下段L４，５参照）

バジャナーナンダのときも、神とつながっていますが、そのつながり、交流は一時的で浅く安定していません。

**②ブラフマーナンダ　brahmananda 「ブラフマンの至福、サマーディの至福」**

「神との交流の至福」の部分の翻訳は、本当は「サマーディの至福」がより近い表現です。

本当はサマーディァーナンダです。

**ブラフマーナンダの状態では、ずっと安定して神様とつながっていて、ふつうの意識は全くなくなります。**

最終的にサマーディに入りますと、ブラフマーナンダの状態になるのです。

「神との交流の至福」という翻訳では、ちょっとイメージが出ないですね。

　☞（『福音』４９２頁　下段L７，８参照）

**③ヴィシャヤーナンダ vishayananda 「感覚の快楽」**

ここでは述べられていませんが、『福音』の別のページ（492頁）で、シュリー・ラーマクリシュナは、3つの楽しみについて、述べています。バジャナーナンダ、ブラフマーナンダと、あと一つ、世俗的な楽しみヴィシャヤーナンダです。もうちょっと完ぺきに言いますと、感覚の快楽です。

☞（『福音』４９２頁　下段L４～L８参照）

**・霊的な楽しみ(spiritual joy)の特徴　（バジャナーナンダの特徴）**

　心が静か

　平安

　安定している

　中から出る

　反動がない

　最初は大変だが、最終的にはとても良い

　永遠

**・世俗的な楽しみ(secular joy)の特徴　（ヴィシャヤーナンダの特徴）**

　心はいつも落ち着かない

　一時的

　反動がある

　最初は甘いが最終的に困る

バジャナーナンダとヴィシャヤーナンダはそれくらい違いがあります。

ブラフマーナンダは全然違います。サマーディの状態です。最高なのです。

（『福音』勉強会　20180807）以上